台湾ローカルカラーの戦時動員について

京都大学　李 淑珠

美術における台湾ローカルカラーの提唱は、1927 年に創設された台湾美術展覧会（台展）によって始められた。第一回展の開催に際して総督府文教局長の石黒英彦が「台湾の特徴を多分に取り入れたる、所謂湾展としての権威」の発揚を目標に掲げた。更に 1930 年の第四回展では、ローカルカラーを表現した最も優れた作品を奨励するための「台展賞」が新設される。以来、台展審査員による唱導のもと、とりわけ「東洋画」部門において台展賞の受賞作品を中心に所謂「台展型」の作品が現れるようになった。

台湾ローカルカラーは原色対比と写生概念を基調とするが、とくに主題表現に着目した場合、風景における「南国情緒」と風俗における「異国趣味」とに分けられよう。榕樹（ガジュマル）などの熱帯植物によって描かれる南国風景に対し、異国趣味は漢民族の「支那風俗」と原住民の「蕃人風俗」によって構成される。また、1927 年の「台湾新八景」の選抜イヴェントは、台湾名勝によるローカルカラーの意図的な創出だと指摘されている。

台展開催時の石黒の談話からもうかがえるように、このような動向の背景には、「蓬莱島の人情、風俗、その他の事情を広く社会に紹介」するという目的があった。しかし実は「台湾の紹介・宣伝」そのものは台展以前にも行われている。1903 年の第 5 回内国勧業博覧会に設置された植民地パビリオン「台湾館」や 1907 年に制作された『台湾紹介活動写真』、更に 1920 年の「文化人招聘プラン」などがその先駆けであり、「内地資本の誘致」を図るものであった。とりわけ 1920 年の招聘プランは、植民地朝鮮を意識したものであり、文学による宣伝効果が大いに期待されていた。

文化人の台湾招聘は失敗に終わったが、同じ頃に新進作家の佐藤春夫が訪台し、五年後に『女誡扇綺譚』（単行本）を出版した。この作品をめぐって展開される「異国情調（exotic mood）」論はまもなく定着し、在台日本人作家西川満の文学、とりわけ『赤嵌記』（1940）に継承される。その受容には「日本版オリエンタリズム」が一役買っていたとも言われるが、ここでむしろ注目しておきたいのは『赤嵌記』における「南方共栄圏イデオロギー」を指摘する意見である。つまり文学における台湾ローカルカラーの戦時動員である。

美術にも同じ現象が起きていたであろう。台展は、1937 年の日中戦争勃発による中止の後、翌年に台湾総督府美術展（府展）に改組、「台展賞」も「総督賞」と改称した。総督賞の受賞条件は不明だが、恐らく台展賞の性格を踏襲しながらも、「時局色」という新要素が加えられていたと考えられる。従って台展時代のローカルカラーが、府展時代に受け継がれつつも戦争に動員され、いかに「聖戦イデオロギー」を帯びるようになるかを考察するのが、本発表の目的である。